

発掘調査で出土する銭貨

－千葉県内の諸例から－

小 高 春 雄

はじめに

筆者は既に千葉県内の大量出土銭の集成¹⁾と関東地方に於ける主要な銭貨出土例からその様相と性格について論じた²⁾。だが、県内中・近世遺跡を広く対象とした銭貨状況の分析は残されたままであった。本稿はまさしくその作業に該当するが、むしろ底辺を形成するこれら諸遺跡を分析することによって銭貨をめぐる全体像が見えてくるのではないかと期待があった。とはいえ、振り返ってみると残された課題も多いと感じる。さらに学際的な研究が望まれよう。

1. 分析対象について

ここで取り上げるのはもちろん発掘調査で出土した銭貨であるが、富本銭はじめ我が国の古代の銭貨については別途ふれる機会をもつとして³⁾、ここでは中世以降を対象とするものである。それでも銭貨ならではの事情で、大量出土銭にはなにかしかの古代銭も含まれている。単純に中世以降は中世の物だけを扱えばよいという訳にはいかないが、微量であることとてそのことを記したうえで次ぎに進むことにする。

なお、耕作ないし工事中など、偶然の機会に出土し、それが大量の場合は近世以降届出の対象となったことから、記録された例も散見する。それら諸例については、総てとは言えないが筆者の集成に扱られたい。

2. 銭貨群の推移

銭貨群の時期的な変遷つまり編年は様々な動きを知る上で基本となる。編年には幾つかの方法がある。一番身近なものは陶磁器・土器などの編年に依拠するものであるが、紀年銘また限られた年代幅を有する遺物の伴出からも導き出すことが出来る。その意味では依拠する編年ないし変遷感の信頼性が問われることとなる。この点、中・近世を通じて本県に搬入・消費された陶磁器とりわけ瀬戸製品との併存関係から検討することとしたい。常滑は単品ならともかく、遺跡単位では古い製品を伴うことが一般的であるし、また、貿易

古瀬戸および瀬戸・美濃大窯製品の年代

(『愛知県史』別編 中世・近世 瀬戸系から抜粋・編集)

古瀬戸	1200	前期様式	I 期
	1250		Ⅳ期
	1300	中期様式	I 期
			Ⅱ期
			Ⅲ期
			Ⅳ期
	1350	後期様式	I 期
			Ⅱ期
			Ⅲ期
			Ⅳ期古
Ⅳ期新			
1400	第1段階	前半	
		後半	
1450	第2段階	前半	
		後半	
1480	第3段階	前半	
		後半	
1530	第4段階	前半	
		後半	
		末	
瀬戸・美濃大窯	1560	第1段階	前半
	1590		後半
	1610	第2段階	前半
			後半

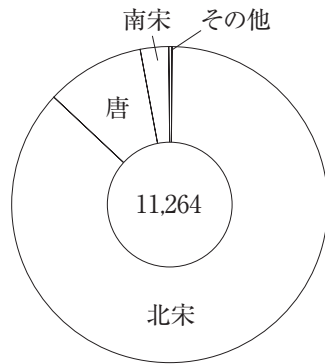
陶磁も伝世や量的推移が一樣でないなどの問題を抱えている故である。なお、以後も含め集計上唐の開元通寶～南唐の開元通寶までは便宜上唐銭とした。少量の場合、蜀や漢の銭貨はまず入ってこないからである。また、統計上北宋銭は北宋のみとしたが、洪武、永楽等明銭はKeyとなることから、銭種名まで記した。近世については、通称の通り古寛永、文銭、新寛永、鉄銭(寛永鉄銭)、寛永波銭、文久銭などと呼称した。以下、ある程度年代が押さえられる例から提示する。

①陸沢町妙楽寺銭⁴⁾ 1310年初鑄の元銭至大通寶を最新銭とする総数11,264点の一括大量出土銭 * 皇朝12銭1・唐896・北宋10,194・南宋156・金9・西夏1・元1・鳥銭1・無文1

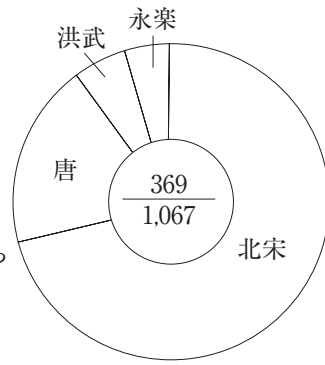
②生実城第15号溝状遺構出土銭⁵⁾ 大窯1段階相当の溝から出土した3緡 * 計287点 唐28・北宋199・南宋9・元1・洪武12・永楽38 明銭割合18.6% (洪武4.1・永楽13.1)

③市原市馬立出土銭⁶⁾ 常滑11型式壺を容器とした大

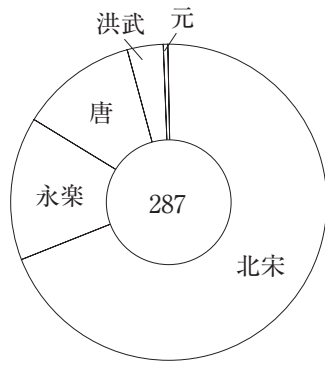
陸沢町妙楽寺出土銭
(最新銭至大通寶初鑄1310)



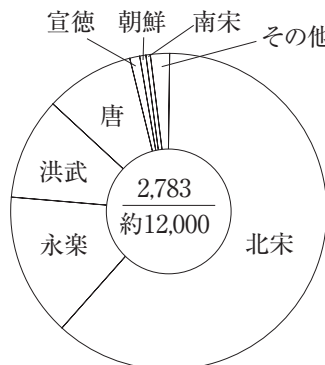
四街道市山梨出土銭
(最新銭永楽通寶初鑄1408)
「横浜毎日新聞」
明治6年6月26日号掲載記事から



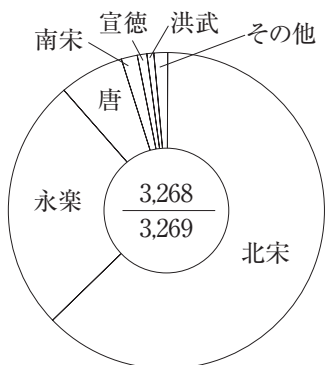
千葉市生実城
第15号溝状遺構出土3緡
(最新銭永楽通寶初鑄1408)



市原市馬立根元寺出土銭
(最新銭世高通寶初鑄1461)



市原市菊間出土銭
(最新銭廣和通寶初鑄1541)



第1図 主要な出土銭 銭種別円グラフ
* 中心部円内下段は総数・上段は判明銭種数

量出土銭 (2969/約12,000調査済)。* 唐261・北宋1715・南宋12・金6・元1・大中1・洪武289・永楽423・宣徳35・朝鮮16・琉球2・無文23・不明186 明銭割合27% (洪武10.4・永楽15.2)

④船橋市東中山台遺跡群 (38) 331地下式坑⁷⁾ 中位から銭貨68点、覆土中から古瀬戸後IV新~大窯1の遺物群出土。* 唐3・北宋40・洪武3・永楽15・模鑄2・不明5 明銭割合28.6% (洪武4.8・永楽23.8)

⑤印西市大塚塚群第1号塚⁸⁾ 常滑11~12型式広口壺内にカワラケと共に埋納された19点の銭貨群。* 北宋10・南宋1・洪武1・永楽2・不明5 明銭割合21.4% (洪武7.1・永楽14.3)

⑥市原市菊間出土銭⁹⁾ 常滑甕を容器とした3269点の大量出土銭 (1541年初鑄のベトナム銭廣和通寶含む) * 唐231・北宋2224・南宋86・金12・大中1・洪武20・永楽844・宣徳37・弘治1・朝鮮5・ベトナム7・不明1 明銭割合27.6% (洪武0.6・永楽25.8)

⑦袖ヶ浦市谷ノ台遺跡 (B地点)¹⁰⁾ 登窯初期の志野鉄絵皿伴出火葬土坑SK221 (北宋11)、18世紀代の肥前磁器碗伴出火葬土坑SK222 (古寛永6・文銭3・新寛永4)、瀬戸天目伴出土坑墓SK225 (文銭6)

この他、近世では八千代市村上供養塚¹¹⁾ のように17世紀代の常滑広口壺2点を容器とした銭貨群 (壺1: 北宋4・近世初めの日本鑄銭らしき永楽1・古寛永86、壺2: 北宋1・加治木2・古寛永147、他に皿5点と寛永 (52) 点などがある。

さらに、遺跡自体がある年代幅に収まる例も挙げておく、想定年代順である。

⑨市原市西野遺跡¹²⁾ 古瀬戸後II縁袖小皿、常滑甕6a・6b、片口7~10型式 * 緡17点 唐1・北宋15・模鑄1

⑩館山市萱野遺跡¹³⁾ ほぼ古瀬戸後I~III、常滑10型式まで。* 計21点 北宋19・不明2

⑫茂原市神田山第III遺跡¹⁴⁾ 主体は古瀬戸後I・II~IV古 * 計14点 唐1・北宋13

⑬成田市小菅天神台II遺跡¹⁵⁾ 主体は古瀬戸後I・II~IV古 * 計27点 唐3・北宋23・模鑄1

⑭多古町桜宮遺跡¹⁶⁾ 古瀬戸後期III~IV新・常滑9型式甕 * 計7点 明銭無し

⑮成田市名木不光寺遺跡¹⁷⁾ 古瀬戸後III~IV古 * 計14点 北宋9・洪武1・高麗1・不明3 明銭割合12.5%

⑯袖ヶ浦市山谷遺跡¹⁸⁾ 主体は古瀬戸後III~IV * 32点 唐2・北宋24・洪武3・不明3 明銭割合10.3%

- ①⑥小見川町大六天遺跡¹⁹⁾ 古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ新、常滑9・10型式中心 *計57点 唐5・北宋33・南宋1・洪武2・永楽4・不明12 明銭割合13.3% (洪武4.4・永楽8.9)
- ①⑦袖ヶ浦市荒久遺跡²⁰⁾ ほぼ古瀬戸後Ⅳ新 *計49点 唐2・北宋33・洪武5・永楽2・不明4 明銭割合15.6% (洪武11.1・永楽4.4)
- ①⑧千葉市後台城²¹⁾ 古瀬戸後Ⅳ新、常滑8・9型式 *計17点 唐4・北宋9・南宋1・洪武2・永楽1 明銭割合17.6% (洪武11.8・永楽5.8)
- ①⑦大網白里市小西城(本城内寺坊跡)²²⁾ ほぼ古瀬戸後Ⅳ新 *計69点 唐5・北宋49・洪武5・永楽4・不明6 明銭割合14.3% (洪武7.9・永楽6.3)
- ①⑨千葉市南屋敷遺跡²³⁾ 古瀬戸後Ⅳ～大窯1段階の屋敷跡 *計41点 唐2・北宋25・洪武9・永楽2・無文1・不明2 明銭割合28.2% (洪武23.0・永楽5.1)
- ②⑩木更津市真里谷城²⁴⁾ 古瀬戸後Ⅳ新～大窯1段階の城跡 *計53点 唐2・北宋32・洪武4・永楽5・不明10 明銭割合20.9% (洪武9.3・永楽11.6)
- ②⑪一宮町一宮城²⁵⁾ 古瀬戸後Ⅳ新からあるが、主体は大窯1以降2から3段階、豊富な貿易陶磁群(染付ⅢB1群のほかにC・F群、同碗B2・C・E群、白磁ⅢC1)を含み、常滑は11型式まで。*計142点 唐2・北宋31・南宋1・洪武7・永楽9・ベトナム1・不明91 明・ベトナム銭割合33% (洪武13.7・永楽17.6)
- ②⑫成田市馬洗城²⁶⁾ 大窯1～3段階 *計45点 唐2・北宋26・南宋1・洪武3・永楽7・鳥銭1・不明

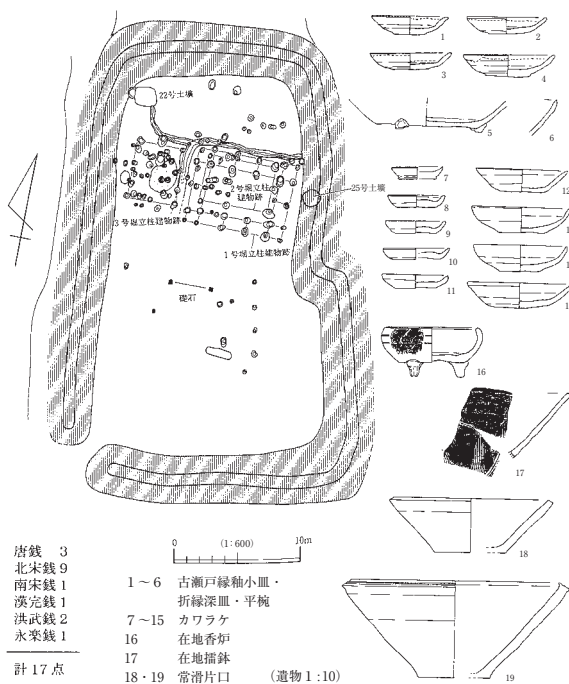
5 明銭割合25% (洪武7.5・永楽17.5)

②⑬酒々井町長勝寺脇館²⁷⁾ 大窯3段階の館跡 *計13点 北宋2・永楽6・宣徳1・不4 明銭割合78%

これらの諸例からいえることは、古瀬戸前・中期段階では銭貨の出土例そのものが乏しいという実態がある。台地・丘陵上では該期の遺構そのものが希薄であるから、その反映ともいえるが、古瀬戸後期段階に入っても遺構はもちろん、遺跡全体でも10点以下という例は多い。これを単純に量的側面に帰納出来ないことは元銭を最新銭とする大量出土銭(妙楽寺・文脇)が存在することから困難ながら、都市・町場や寺社など消費地や階層という問題もあるのかもしれない。ただ、唐銭、北宋・南宋銭の比率は時代によって大きな変化はないことが確認されており、その延長に古瀬戸後期段階があるのだろう。

大きな画期は遺構に伴う出土例が一般化する後Ⅳ期以降である。実は明銭といってもその最初に当たる大中通寶(初鑄年1361年)は混入率が極めて低く、洪武通寶(初鑄年1368年)以降にならないと入ってこない。では14世紀後半～15世紀初め(編年観では古瀬戸後Ⅰ・Ⅱに相当)に含まれるかということ、否である。これはその後に出た永楽通寶ではもっと極端で、後Ⅳ新以降になって漸く少量の場合でも入るようになる。この点は既に指摘されているように、明の海禁政策に加え貨幣をめぐる中国の国内事情の変化ももちろんあろうが、新しく加わった銭への不信=つまり選銭の影響もあるのかもしれない(誤解のないように言っておくと、15世紀後半から散見される幕府・諸大名の発した所謂選銭令というのは単純に選ぶべき銭を規定したのではなく、むしろ制限を示して銭貨のスムーズな流通を促したものである)。ともあれ、古瀬戸後Ⅲ期までは明銭の流通量そのものが限られていたということの実態であろう。5%前後の混入率では統計上20点以上でないが入ってこないからである。

さらに付け加えておこう。佐倉市神門房下遺跡²⁸⁾は古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ～Ⅳ古期内にほぼ収まる遺跡であり、且つ1単位の屋敷地として把握される例であるが、そこでは26点のうち明銭は入っていなかった(唐1・北宋25、1点/100㎡)。ほぼ同時期幅ながら、大窯1製品も若干含む成田市駒井野荒追遺跡²⁹⁾でも同様である(唐2・北宋10・不明1)。その一方、千葉市中野台遺跡³⁰⁾は後Ⅳ新を中心とし、大窯1段階まで継続する大規模な屋敷地群であり、しかもほぼその全域を調査したという点でも特筆されるが、その組成はこ



第2図 千葉市後台城跡(古瀬戸後Ⅳ新时期)

の段階での様相を良く示している（計78点、唐1・北宋62・南宋3・洪武5・永楽7、明銭割合15.4%）。ちなみに、ここでは100㎡当たり0.3点である。

古瀬戸後Ⅳ新という時期は房総の中世遺跡数がミニマムとなる頃ではあるが、それは後Ⅰ・Ⅱ期から台地上に姿を現した中世集落・屋敷地がこの前後を境に多く衰退に向かう一方、大窯1以降は新たに出現した戦国城郭とその城下が中心となる。ただこれは単純に中世村落が再編されたというのではなく、集落・屋敷地の立地主体が再び山麓に移ったとみたほうがよい。大窯1以降供給量が減ったのではなく、その消費地に変化が生じたのである。

明銭が組成に登場する初期の段階では洪武が卓越する。しかし、大窯1段階の内（その後半か）に逆転現象が起き、2段階以降は明銭の主体が永楽となる（ただその流れは洪武も共に増加するケースもあるなど一様ではないが）。さらに、量的に担保されればその中に16世紀代の明銭（弘治通寶）やベトナム銭が混じるようになる。一宮城出土銭がその好例である。そして大窯3段階に至り永楽の卓越が明瞭となり、近世を迎えることとなる。ほぼこのような流れとなろうが、物指しとなった古瀬戸また大窯編年の年代が完成されたものとみるのは早計である。というのは、筆者も扱った藤沢良祐の作業は型式編年であり、あくまでもある程度の年代幅をもって相対的な前後関係を保証するものといっよよい³¹⁾。それ故、文献資料にみられる遺跡・城館の廃絶年代などから絶対年代を当てはめた古瀬戸後期～大窯編年には流動的な要素もある。だが、編年そのものが揺らぐことはないと思われるので、要するにこれは消費地でも安易に年代を援用するのではなく、年代決定に資する様々な資料から随時チェックしながら精度を高める努力が必要であろう。筆者の感想では後Ⅳ新は全体に多少下るかと思われ、大窯1前半もそれに依ってスライドするのではないかとみる。

しかしこのような流れもある程度の量が担保されて始めて信頼に足るものとなる。上にあげた資料に明銭割合を加えたのはまさしくそれが16世紀代のバロメーターとなるからである。しかも、単なる割合ではなく、洪武と永楽の比率の推移が鍵を握っていることはこの間の大量出土銭の広域な分析が物語っている。同じ明銭でもその前後の大中や宣徳が極めて低い比率で一貫している（宣徳は大体1%前後、大中はそれ以下）のに対し、洪武は5%前後から場合によっては10%代まで上がるものの、以後は頭打ちとなり、それに代わる

ように永楽の卓越が始まり、最多銭種となることは菊間出土銭の事例が物語っている。しかも、1541年初鋳のベトナム銭である廣和通寶を含むことは大窯2段階の内にもそのような変化が起きたことを予想させる。また文献や出土遺物から、16世紀代にわたって存続したことが確実な佐倉千葉氏の居城である酒々井町本佐倉城の場合、とりわけ戦国末期に取り立てられた外郭部や出郭の様相は銭貨とも連動する³²⁾。もちろん、全国的に見れば永楽の卓越は地域差があり、むしろ洪武の減少と裏腹の関係にある。本県を含む南関東は永楽卓越地域であり、選ばれた洪武は他へ移動したのである³³⁾。土坑墓や火葬土坑における永楽6文銭副葬の背景は民俗的な事例という側面もあるが、永楽の集中がもたらした副産物というべきである。

4. 遺跡と銭貨

キャッシュレス社会とも云われる今日、銭貨を巡る環境は大きく変わろうとしている。しかし、中世と言う時代はほぼ中国銅銭に依拠しており、近世も一部を除けば我が国で鑄造された金属貨幣が流通した時代であった。そういう我が国独自の貨幣事情を先ず考慮しておかねばならない。東国で貨幣経済が浸透ようになったのは鎌倉時代でも後半といわれている。掘立柱建物・井戸・土坑群で構成される中世初頭の君津市上新田張山遺跡³⁴⁾では中世銭貨は出土しなかったし、房総の台地上でしばしば発見される平安末～鎌倉時代の特徴的な土坑墓（長方形の墓坑にカワラケ・鉄・合子など副葬）に銭貨が入らないのはその意味で当然である。また、一般的に城館では銭貨が少ないのであるが、鎌倉期の館跡の好例である君津市外箕輪遺跡³⁵⁾（約4,200㎡の本調査で北宋4点）、鋸南町下ノ坊館³⁶⁾（4,900㎡の本調査で北宋2点）でもそれは確認される。また、鎌倉～室町期の板碑や骨蔵器に伴う銭貨の出土例に事欠くのも³⁷⁾その延長にあらう。ただ古い時代の遺跡は立地上低地ないし低位の段丘上に営まれることが多いので、千葉や船橋などの都市的な場や寺社一帯でどういう状況を示すのが課題として残る。

下総～上総の台地上縁辺や上総～安房の段丘面上に遺跡が広く展開するようになったのは、既にみたように古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期以降であり、房総の大量出土銭のほとんどがそうである。多くの調査例を瞥見すると、僅かではあるが性格の差を示唆する例はある。そのひとつとして、津や渡し場・湊あるいは宿など交通を物語る場が存在する。千葉外湊の性格を有する浜野（調

査例として蔵屋敷遺跡³⁸⁾、養老川三角州縁の諸湊（背後の墓域：姉崎藁崎遺跡・八幡宿市街の濃密な中世石塔群³⁹⁾）、水戸街道の渡し場且つ台宿の柏市中馬場遺跡⁴⁰⁾、小櫃川中流域の宿・市場ではないかと推測される中世横田郷⁴¹⁾など、主要河川や街道沿いの要地では町場が形成されたことは確かである。中馬場遺跡を除けば何れも低地であり、限られた調査面積からして銭貨の消費像に迫るにはさらに意図的なアプローチが求められよう。寺社の門前も文献から存在が確認されているが（下総一ノ宮香取神宮、上総一ノ宮玉崎社、千葉妙見宮⁴²⁾など）、一向に進展がない。こういう点が見明らかになっていかないと銭貨のみならず、中世の全体像が見えてこない。

なお、低地とりわけ耕地と銭貨との関わりについては調査手法次第という面はあるが、意外に出土例は多い。市原市の菊間～郡本に至る台地沿いの海岸平野の例（市原条里制遺跡群⁴³⁾）では約41,300㎡の本調査範囲で中世241点、近世93点の銭貨が出土した。中世では100㎡当たり1.7点となる。五銖銭～永楽までを含み、12世紀代以降の貿易陶磁や古瀬戸・大窯製品が出土しているので、それに見合った組成であろう。小櫃川の氾濫原に当たる木更津市菅生遺跡⁴⁴⁾では、32点の銭貨（永楽1点を除き唐・北宋銭）が出土した。近辺の自然堤防に中世の館跡があり、その南西数百mに相当する一帯である。恐らく中世の段階から耕作地であったのだろう（0.2点/100㎡）。谷津田奥の類例に長南町田宿川間遺跡⁴⁵⁾がある。現水田下約1mの宝永火山灰層直下に古瀬戸後～大窯期、また近世の遺物と共に銭貨が含まれる（計68点、北宋と古寛永拮抗、僅かに新寛永）。丘陵裾に隣接した地であり、離れるに従い遺物密度が薄くなっていくことから、屋敷地との関係も指摘出来よう（7.4点/100㎡）。何れも水田調査過程で埋没土を剥ぐという手法が効果的に働いたと思われるが、低地の場合、集落・屋敷地などとの距離も関係するのであろう⁴⁶⁾。

5. 副葬・地鎮・塚

現在、埋蔵銭以外に最も出土量が多くかつ遺構の性格を端的に示すのは六道銭である。人骨に伴って6枚出れば申し分ないが、骨がなく銭貨も数点だと、土坑の形状や覆土の様子も加味して判断することとなる。このような習俗がいつ定着したかは不明ながら、日常的な民俗例は記録に残ることは少ない。その点、外国人には奇異に映ったようで、幕末のスイスの政治家エ

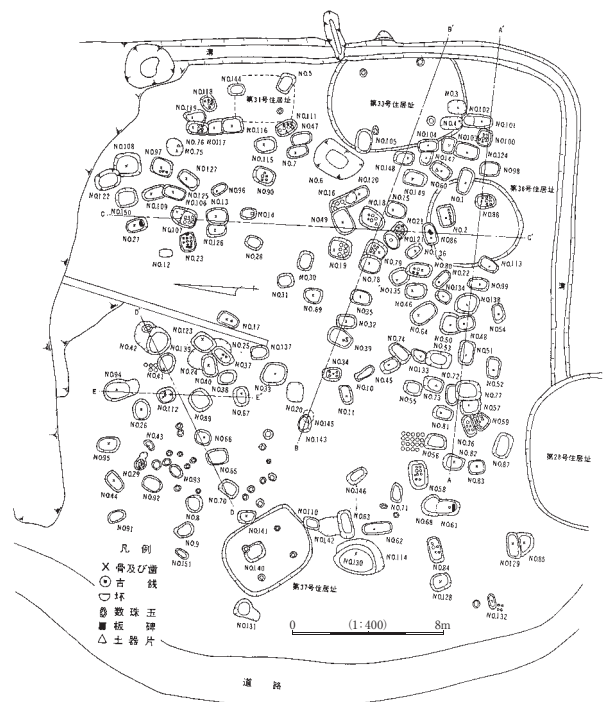
メエ・アンペールの日本滞在記『Le Japan Illustre』⁴⁷⁾には「まさに棺に蓋をしようとする時、この信心深い女性は埋葬の痛ましい順序の一つ一つ追って、最後に屍体に身を屈めて、両手にもっとも奇異な金銭を持たせる。…そしてまた、四つにたたんだ紙の中には、この死者がこの世に生まれ出たとき、母とをつないでいた臍の緒が入っている。…」と見える。そして、貧しい階層の人々は粗末な火葬場で薦を被せ拾い集めた枯れ木に火が付けられるとも記している。幕末の江戸での様子ではあろうが、当地では果たしてそれがいつに遡るのか調査例から辿ってみよう。

①東金市前畑遺跡南側土坑墓群⁴⁸⁾ 計106点、銭貨出土土坑墓・火葬遺構割合18/84基（5・6文銭6基）、明銭割合18.9%（永楽13.2・洪武5.7）、周辺から古瀬戸後IV～大窯1・2期陶器出土、北側に館跡。

②佐倉市臼井南遺跡石神第1地点⁴⁹⁾ 計94点（近世無し）、銭貨出土土坑墓割合26/151基（5～7文銭10基：北宋のみ1・永楽のみ1・唐宋明4・その他4）、明銭割合22.2%（永楽20.0・洪武2.2）、紀年銘板碑3基（1502、1532、1563）。

③松戸市行人台遺跡⁵⁰⁾ 計174点（中世160、近世14）、銭貨出土土坑墓割合27/36基（5・6文銭5基）、明銭割合36.3%（永楽28.8・洪武6.3、近世除外）、ベトナム銭1点

④流山市上貝塚第I遺跡⁵¹⁾ 計135点（近世無し） 銭貨出土土坑墓割合14/25基（5・6文銭12基、内永楽



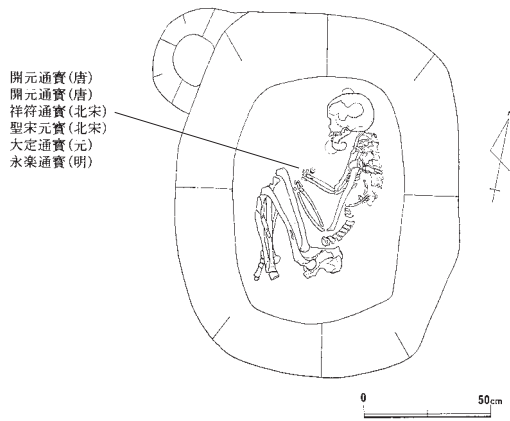
第3図 佐倉市臼井南遺跡石神第1地点の土坑墓群

4基)、明銭割合42.3% (永楽卓越39.3・洪武0.7)

⑤酒々井町北大堀遺跡⁵²⁾ 計255点 (近世無し・不明31) 銭貨出土土坑墓割合51/121基 (5～7文銭27基内宋・明6、永楽12基)、永楽卓越59.4% (洪武1.8)、本佐倉城外郭土坑墓群

⑥佐倉市岩富萩山4号塚⁵³⁾ 計82点 (近世無し) 銭貨出土土坑墓割合11/56基 (5～7文銭11基、内永楽7基)、永楽卓越71.3%、径20mの塚一帯に土坑墓群

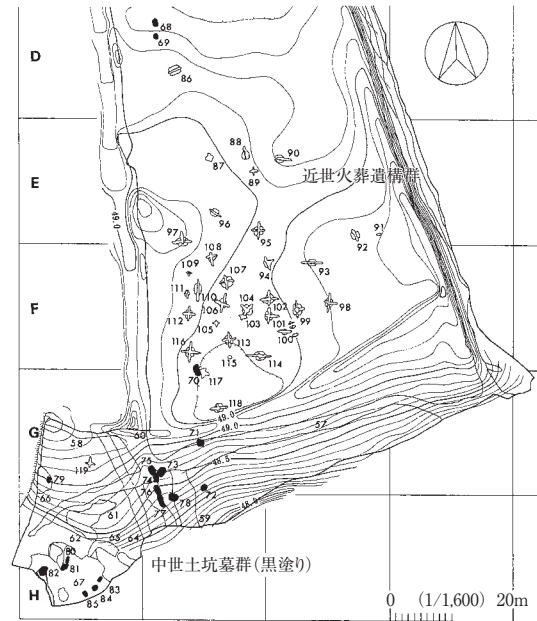
⑦我孫子市鹿島前遺跡⁵⁴⁾ 計506 (中世299、近世171、不明30) 点、銭貨出土土坑墓割合79/168基 (宋銭のみ～新寛永まで、寛永銭含むもの21基、5・6文銭61基：永楽17・寛永15)、永楽45%・洪武4% (中国銭内割合)、15世紀代ベトナム銭2点・16世紀初めの弘治通寶1点・題目銭1点・念仏銭2点含む



第4図 我孫子市鹿島前遺跡 (第3次) 7号土坑墓
*横臥屈葬人骨の胸に当てた手のなかに六道銭を持たせている。
16世紀代の良好な遺存例。

⑧流山市三輪野山第三遺跡⁵⁵⁾ 計393点 (中世167、近世222、不明4)、銭貨出土土坑墓割合53/72基 (宋銭のみ～新寛永まで、寛永銭含むもの29基、5・6文銭9基・永楽6文6・寛永6文9)、永楽52%・洪武4.2% (中国銭内割合)、東側中世区画内で瀬戸・美濃大窯3～登窯初期以降の陶器出土

⑨市原市小田部新地遺跡⁵⁶⁾ 計189点 (中世111、近世65、不明13)、銭貨出土火葬土坑割合25/34基・土坑墓10/18基、調査区南西端で中世土坑墓群、その北東隣接地で中世～近世初めの火葬遺構群と明確に分離、土坑墓群の銭数内訳：永楽6文2基・北宋6(4)文2基・唐北宋+明6基、火葬遺構群銭数内訳：北宋 (唐含む) 5(6)文7基・北宋+永楽5文1基・寛永6(5)文9基・不明6文1基・その他7基、土坑墓群銭種割合：唐1・北宋30・洪武1・永楽8・宣徳1 (明銭割合22.0%)、火葬遺構群銭種割合：唐3・北宋50・永



第5図 市原市小田部新地遺跡の土坑墓・火葬遺構群

楽5・寛永65 (唐・宋43%・永楽4%)

⑩富里市稲荷谷津遺跡⁵⁷⁾ 計300点 (中世125、近世161、無文1、加治木銭1、不明12)、銭貨出土土坑墓割合47/90基 (宋銭のみ～新寛永まで、5(6)文銭31基：永楽8・寛永16)、永楽55.2%・洪武1.6% (中国銭内割合)、至道6文銭土坑1基、題目銭2点含む。

⑪東金市鉢ヶ谷遺跡⁵⁸⁾ 計192+a点 (中世28、近世141、不明23+a)、銭貨出土火葬土坑・土坑墓割合64/122基 (宋銭のみ～新寛永まで、5(6)文銭13基：北宋1・寛永12)、永楽10.7%・洪武0% (中国銭内割合)、題目銭3点含む。

以上は何れも大量の出土例であり、小田部を除けば溝囲みの区画内に密集した状態で検出された土坑墓・火葬遺構群である。既述した編年観も加味して古いと思われるものから並べてみたが (いわば流れ)、もちろん重複する時期幅を含んでいる。これから次のことが言えるかもしれない。

○集団土坑墓・火葬遺構群は大窯1段階以降に出現する。

○出現と同時に既にある程度の割合で銭貨副葬例が存在する。

○副葬例は中・近世を通じてあくまでも全体の一部であるが、当初はその1/4程度から次第に半数を超えるようになる。

○副葬数は当初から6文という例があり、その後6文例は増加するものの、全体を占めることはない。

○宗派と副葬との関連性は特に窺えず、所謂民間信仰

に由来する可能性が高い。

○副葬と銭種との関係は至道元寶例を除き特に窺えない。

○古寛永銭出現（1636～）後当座はともかく、新寛永代に於いても前代の中国銭他が組成に残っている。

○小田部の例では、底面に十字型ないし一文字型の溝を切る火葬遺構はそうでない遺構より古い。

古代～中世に及ぶ土坑墓群ではないかとされる船橋市印内台遺跡・本郷台遺跡群⁵⁹では銭貨の出土はほとんどない。14～15世紀の墓域と考えられる佐倉市古屋敷遺跡⁶⁰土坑墓群の場合、浅い土坑に火葬骨・焼土・灰・炭を含む第1土坑墓群（敢えていえば火葬骨墓）と土坑墓、火葬遺構より構成される第2土坑墓群があり、僅かではあるが後者に銭貨が副葬される。銭貨には明銭が含まれず、6文銭の例がないなど、古い様相とみてよい。

変化が起きるのは古瀬戸後Ⅳ期辺りであるが、それも新の段階とみてよいだろう。横芝光町八石田遺跡⁶¹はほぼ後Ⅳ期新の土坑墓群であるが、14点の銭貨（唐1・北宋9・洪武1・不明3）中に永楽銭は含まれていなかった。また、東京湾岸では15世紀末頃から安山岩製の小型石塔（五輪塔・宝篋印塔）が広く普及するようになったが、土坑墓と共伴ないしはそれと混在または整理するように墓所が営まれる例が多い。袖ヶ浦市神田遺跡⁶²の場合、土坑墓56基中12基に銭貨の副葬（計125点）がみられ（火葬遺構6基からは銭貨無し）、6・5文例はそのうちの7基であった。千葉市亥鼻城跡外縁部⁶³では47基中7基に銭貨の副葬がみられ、6・5文例は5基にのぼる。銭種は神田遺跡では明銭が約1/4を占め、洪武：永楽比が1：2となるのに対し、亥鼻城では北宋主体に洪武と永楽が若干というところであった。石塔の年代観も含め、亥鼻城のほうが古い様相を示すが、共に16世紀前半の内に収まるのは間違いない。重要な点は、銭貨副葬者が15～20%代にあることで、銭貨副葬者とそうでない者との違いがどこにあるのか、遺存人骨や他の副葬品とも併せた分析が求められる。

銭貨副葬の習俗、とりわけ六文銭については六道銭の延長と見られる。その背景としては板碑や石塔における変化・即ち15世紀後半以後その造立主体が民衆に移り、庚申を始めとした民間信仰の盛行と連動したことが想定される。火葬遺構の場合、銭貨は焼けているので、焼成前に副葬され特に持ち去られた様子もない。この点は両墓制とも関連するのであろう。なお、鉢ヶ

谷例は土坑墓群と火葬遺構つまり火葬場が近接したケースである。

新寛永主体の場合、大規模な調査例を欠いているが、松尾町中谷遺跡⁶⁴では土坑墓18基中13基に銭貨が副葬され、うち6文は6基であった。他の調査例も含め、近世後半には確かに6文副葬率は高まる傾向がある。銭の副葬方法を語るものとして根木内城第6地点⁶⁵があげられる。ここでは、銹着例が目立ち（銭貨出土土坑墓割合11/34基、その内8基）、その内訳は27点銹着1、6点銹着3（紐括り1）、5点銹着1、4点銹着1、2点銹着2と様々である。紙ないし布に一括する例と言えよう。なお、近代への推移を解き明かすには、調査の対象が近世後半に及ぶことが求められる。

集落と墓域との関係を示すものとして、芝山町古宿・上谷遺跡⁶⁶があげられる。「C地区」では台地縁辺で地下式坑や粘土貼土坑、土坑群よりなる区画があり、屋敷地の一画に相当すると考えられる。一方、それより南の「B地区南」に土坑墓群（120基以上か）が営まれている。この土坑墓群は比較的遺物（古瀬戸後Ⅰ～大窯2まで）に富み、銭貨24点の組成は唐3、北宋11、明2（大中通寶1・永楽1）、不明8であった。屋敷地の遺物（古瀬戸期若干、銭貨は2点、北宋1・永楽1）が少ないという恨みはあるが、台地先端の岩山城と宿そして墓域の関係（しかも銭貨においても）が垣間見える一例といつてよい。屋敷地からは火葬遺構（8基）も出ているものの、これは少し下る所産と思われる。

土坑墓群の上に塚が築かれた例もあげておきたい。木更津市東谷十三塚⁶⁷は主塚を中心に東西に陪塚が連続する典型的なもので、その盛土下や周囲に渡って土坑墓群が展開する。17点の副葬例他5例が報告されており、古墳群のマウンド内からも銭貨が多数出土していることから、本来はさらにあつたとみられている。何れも唐・北宋銭主体で永楽は1点を超える例がなく、近世遺物の伴出もないなど、16世紀も前半代の所産としてよいだろう。その上に十三塚と、さらにその周囲に17世紀後半の礫石経埋納塚2基を含む塚群が築かれている。集落背後の山上が墓域から聖なる宗教空間へ変化したわけながら、塚には銭貨が介在することはなかった。

意外かもしれないが、銭貨は人間だけが対象ではない。匝瑳市城ノ台遺跡⁶⁸1号土坑墓では牛1体分の遺骸の上位で北宋銭2点が、また、小見川町かのへ遺跡⁶⁹では馬骨に伴って六文銭が出土した。しかし、

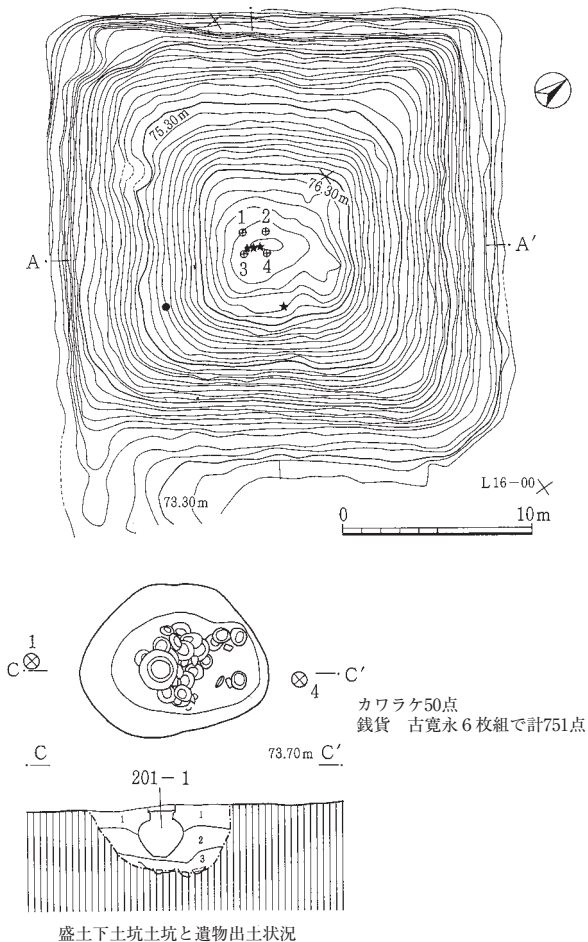
馬埋葬例のほとんどに銭貨は伴わないので、これらは特殊な例であろう。なお、一部の銭種（至道元寶）が選ばれた理由については塚の節で扱う。

塚の出土例がこれに次ぐ。房総では中世に遡る塚の調査例しかも銭貨を伴う類例は少なく、経塚に於いても16世紀代に至って、成田市天王船塚11号経塚⁷⁰⁾（墳頂部直下から銅経筒・カワラケ1・永楽2）で認められるにすぎない。大網白里市鷺山入遺跡4号塚⁷¹⁾（塚内土坑から唐1・北宋3・洪武1・不明1）や木更津市西祈禱谷古墳群⁷²⁾（8基からなる塚、SM002から唐・宋3、永楽1、不明1、SM003から北宋2）などが中世に遡る例といえようか。

近世では盛土下土坑の常滑壺内に入った古寛永751点（下にカワラケ50点）の市原市新生萩原野遺跡A1-1号塚状遺構⁷³⁾がまとまったものとしては最古であろう。市原市域は出羽三山信仰の盛んなところで、「塚築造時の供養祭の痕跡」と報告されている。市域では平野馬頭塚（三山塚）や小草畑三山塚など同程度の出土例があるが、前者は銭貨の数次にわたる「撒き

銭行為」を知る好例（鏡・数珠玉伴出）である。これに次ぐものとして、船橋市八木ヶ谷遺跡遠山塚群3号塚⁷⁴⁾や八千代市村上遺跡群第2塚群001遺構⁷⁵⁾があげられる。前者は主に旧表土上で肥前染付瓶や数珠玉、頭髮などと共に276点（唐北宋7・永楽1・加治木1・古寛永267）が出土した。瓶は17世紀中葉の有田産で逆修塚かとされている。後者は墳丘下中央部2か所で出土し、北側土坑内ではカワラケ・ガラス製数珠玉と共に222点の銭貨（北宋1・洪武1・文銭88・古寛永132）が、また、近接する南側では掘り込みを伴ってはいないが、文銭5・新寛永1点が一括して出土した。同じく数珠やカワラケを伴い、人骨は確認されていない。共に3基また8基中の1基にのみ集中する点に類似性がある。佐倉市直弥後谷津4号塚⁷⁶⁾は極めて特異な例である。盛土下土坑内から377点の一括埋納銭が出土した例であるが、古寛永が約80%を占め、6点の唐・北宋銭を除いた残りの16%が至道元寶であった。至道はしいどうに通じ、単なる個人というより在家の信者を対象としたケースであろうか。既に紹介した稲荷谷遺跡の至道6文銭副葬土坑墓と通じるものである。

塚から出土する銭貨はまさしく信仰の産物ではあるが、伝承や石塔を欠き、内部にこれといった遺構・遺物がなく、銭貨のみが出土するという例は多い。墳頂部下50cmに達しない位置で銭貨48点（古寛永47・至道元寶1）が出土した山武市栗焼棒1号塚⁷⁷⁾はその典型であり、しかも数量的にもまとまっているので間違いはないが、10点未満の場合はその判断に戸惑う。この点、古墳墳丘裾から新寛永10点がまとまって出土した近隣の山武市一本松遺跡2号墳⁷⁸⁾のケースなどは塚に仮託したものかもしれない。近世後半の場合は伝承や墳丘上に石碑があったりと、その性格を特定出来るケースが比較的多いが、逆に銭貨の一括大量出土例はほぼ無くなってしまふ。佐倉市白井庚申塚⁷⁹⁾はその過渡的な例（計181点：北宋銭1点を除き、古寛永・文銭で構成、かつて庚申塔遺存）であり、成田市畑ヶ田地藏前塚⁸⁰⁾（裾部に享保2年の齋念仏塔・頂部に嘉永元年の出羽三山塔、封土内から古寛永1・文銭2・新寛永6、塚自体は齋念仏塔に伴うものか）や同大室十三塚⁸¹⁾（中央大塚に文政期・安永期の十三仏供養塔が遺存、寛永・文久銭出土）は該期の様相をよく示している。民間信仰に関わる石塔は18世紀も後半になると、像塔から文字塔に変わるが、何れも信仰の形骸化が背景にあるのだろう。



第6図 市原市新生萩原野遺跡A1-1号塚状遺構（一本松塚）

このように塚の場合は供養の対象が多岐にわたっており、しかも同じ塚群の中でも相違があるなど、宗教・信仰の多様性が背景にあらう。いずれにせよ、物との仲立ちをする銭貨故の側面というべきか。

広域にみれば中世後半になると庚申塚など、民間信仰に関わる塚で銭の出土がみられるようになる。また、近世を含め六十六部経塚や一字一石経塚でもまとまった出土例がある。もちろん、信仰という面では霊山・霊域も同様で、この点、神木なども含め幅広くその対象を考えておかねばならない。

地鎮に伴う例も多い。15世紀代の武士の屋敷地かと思われる成田市小菅天神台Ⅱ遺跡⁸²⁾ 23号掘立柱建物は間仕切りと周囲に縁が巡る遺跡内の中心的な建物であり、その内の3か所の柱穴から銭貨各1点（2点北宋・1点不明）が出土した。カワラケ1点も柱穴底から出土しているが、銭貨に伴ってはいない。その一方、16世紀後半の芝山町田向城⁸³⁾では主郭内掘立柱建物内部の柱穴にカワラケ6点が等間隔に置かれ、そのうちの4つに銭貨が各1点（内訳北宋3・永楽1）づつ入っていた。これも縁を伴う主要な建物の中央から見つかっている。匝瑳市福岡遺跡⁸⁴⁾は中世～近世にわたる寺院跡であり、とりわけ大窯2・3段階の陶器を多く出土した点で房総では希な例である。中世（15～16世紀）の4棟、近世（17世紀）の1棟に銭貨の埋納がみられた。中世では一つの柱穴に2点セット（北宋2点2、北宋・永楽1、永楽2点2）が3棟、同1点（北宋）が1棟、同8点（北宋7・西夏1）が1棟であったが、近世では同じくひとつの穴に合口カワラケ5点・銭貨1点（古寛永）と相違がある。合口カワラケを多用する例は近世の成田市烏内遺跡⁸⁵⁾でも確認される（316号跡・合口5、328号跡・合口3・単独2）。しかし、ここでは銭貨は伴っていない。その一方、芝山町洞谷台遺跡⁸⁶⁾では銭貨7点（古寛永1・新寛永6）にたいし、カワラケはない。地鎮における銭貨とカワラケの関係は一様とはいえないのである。

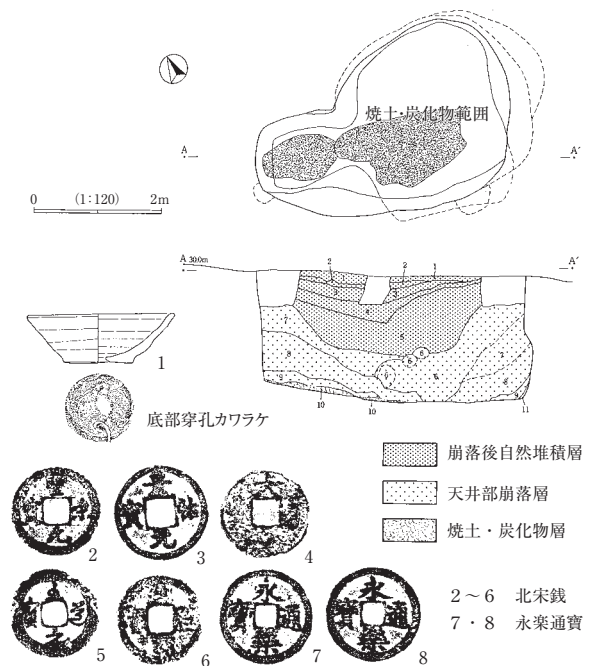
近世前半の年代が押さえられるものとして、上総国分僧寺跡近世薬師堂⁸⁷⁾の例をあげておかねばならない。薬師堂は正徳6（1716）年に完成したが、その中心に位置する土坑（1828）では棒状木製品を敷いた上にカワラケ7・文銭1・古寛永4・新寛永8点が納められていた。その年代は宝永火山灰の介在から宝永4（1707）年直後とされており、銭種構成とも矛盾しない。

ところで、おもしろいことに、輪宝墨描土器に銭貨を入れる中世後半の典型例は柱穴というよりその周辺

から見つかっている⁸⁸⁾。鎮壇儀式後浅い土坑に廃棄された結果であろうが、起工から上棟に渡る過程で考える必要があるのだろう。なお、これら地鎮・鎮壇はもちろん建物（掘立柱建物柱穴、建物内外土坑、基壇など）だけとは限らず、全国的にみれば、橋（橋脚）、道（辻）、井戸・泉などに及んでおり、容器も壺、土釜、カワラケなど多様である⁸⁹⁾。それゆえ、該当する遺構を調査する場合はもちろんのこと、鎮め一般について柔軟に考えておかなければならない。

その他で特筆されるのは地下式坑と銭貨との関係である。地下式坑から銭貨が出土する例は多い。数点はもちろんのことだが、10数点～数10点という数量もしばしば存在する。松戸市根木内城⁹⁰⁾第2地点3B号地下式坑では天井崩落土下から銭貨13点（北宋10・洪武2・永楽1）が出土した。その一方、第4地点1号地下式坑では天井部直上から銭貨14点（唐3・北宋7・朝鮮1・洪武1・宣徳1・世高1）が出土している。天井崩落土との関係が指摘できるのは他にもあり、成田市松崎外小代内小代遺跡⁹¹⁾SK022他4基では天井崩落土下から銭貨が出土した（20点1基、4点2基、2点1基、共に不明含む北宋銭のみ。他に銭貨47点例もあり）。また、成田市芝西霜田遺跡⁹²⁾SK002では底面に多量の焼土・炭化物が遺存し、その上を天井崩落土らしきブロック層が覆っており、銭貨10点（北宋6・永楽2・不明²⁾と底部穿孔カワラケが出土している。

天井崩落土直下ないし直上に銭貨が出土、しかもあ



第7図 成田市芝西霜田遺跡SK002地下式坑

る程度の数量と共に出土する場合はやはりその廃棄に関わる行為であろう。意図的な損壊は一種の鎮め行為ともいえるが、自然埋没例との相違は何処にあるのだろうか。

ところで、枚数については六道銭はともかく、これといった傾向ないし法則性は県内諸例では指摘に至らなかった。全国的には、井戸で1点の事例が多くある反面、緡銭塊や数千点に上る大量出土例まであって、これも開口する遺構の宿命であろうか。類似する胞衣習俗では容器としての壺、カワラケ、焙烙などに銭貨が入れられることがあるが、遺物（筆・墨・刀子など）を伴う例や枚数など（古代から5枚例がしばしば見られる）が手掛かりになろう。

以上は銭貨それもその性格が明瞭な事例についてまず紹介したが、もちろんそれ以外の場所、例えば屋敷地の一角や周辺に何も無い斜面の土坑内⁹³⁾、果ては道路まで⁹⁴⁾ 広く出土するのは言うまでもない。中世の場合、とりわけ郷村・宿、湊、寺社、城館、街道など、調査担当者なら誰でも経験することであるが、僅かずつ集積された「資料」の山にどんな意味づけが可能であろうか。この点、調査蓄積のある古都鎌倉でも既に御家人屋敷地、町屋、寺社、道路、墓地などそれぞれの遺構また包含層から多くの銭が出土しているが、層位別、遺跡別の検討はなされても、多くの埋没銭の意味づけについて積極的な発言はなされていない。結局それは点と点の調査また限られた調査範囲では限界もあるところながら、では広範囲にしかも研究者なら誰でも知っているような例（それも中世になってしまう）を紹介・分析して、今後の糧としたい。

6. 比較作業

広島県草戸千軒町遺跡⁹⁵⁾ は芦田川の中州に営まれた町場・農村であるが、地形や遺構検出状況からその2/3程（6.7ヘクタール）が調査された画期的な例である。銭貨は遺構別、表土・包含層別の出土状況が報告されている。それによれば、大甕に入った約12,700点また5,000点の緡銭塊は別として、総数約3,700点（5.5/100㎡）が出土しており、遺構と表土・包含層別の比率は3.5:6.5となる。遺跡の年代幅は13世紀中頃～16世紀初頭にわたっているが、活況を呈したのは14世紀～15世紀後半の間である。川に並行して中央に大道が走り、それに直行するように東西の小道が設定される。各期を通して中心となったのは、中央やや北よりの区画（商人・職人の屋敷地、寺院）であり、



第8図 草戸千軒町遺跡ほかの位置

木簡、貿易陶磁、土師質土器、仏具などがまとまって出土している。木簡は金銭や穀物など貸付けに関わる記録ないし付札として使用されており、商人、具体的には土倉の存在を指摘している。そして、それは「物資の商取引や金融に直接に関与」し、寺と一体化した存在ではなかったかとする。銭貨の約60%はこの一帯から出土しているが、注目されるのはこの一角にありながらも寺と道を隔てた一帯の包含層・表土（29次調査分）からとりわけ多く出土している点である（面積比にして他の10倍、ちなみに2,700点の大甕出土地はその南側隣接地）。ここはとりわけⅡ期（14世紀後半）には大形の掘立柱建物が建っていたところで、土倉とした場合、銭貨の埋没がリンクするのであろうか。

草戸千軒は草津→草井地→草戸と変化してきたというが、津を湊、井地を市（寺の北側柵囲みの地か）とみれば、まさしく流通・商業の町である。発掘された箇所はあくまでも全体の一部ではあろうが、このような町場における埋没銭貨の様相が明らかになった意味は大きい。ただこの遺跡だけでは多分に感覚的にならざるを得ない。そこでもう少し類例を見てみよう。

同様の類例に静岡県元島遺跡⁹⁶⁾がある。遠州灘に開口する太田川河口を約2.5km遡った右岸に立地し、河川拡幅に伴い約50,000㎡の調査が行われた。13～16世紀にわたる溝囲みの屋敷地群からなり、何期かの変

遷過程が明らかにされている。各屋敷地は母屋、納屋また小屋と推測されている大小の掘立柱建物、土坑、井戸、屋敷墓などから構成されており、14世紀前半に一旦衰退するものの、15世紀代に入って元島集落は再編され、その中頃～後半に「繁栄期」を迎えたとされる。銭貨は2区、8区、9区、つまり、北側で集中して出土(272/419:このうち南側墓址出土36点)しており、まとめて17緡分(1,647点、最新銭至大通寶)が見つかったのもこの一角である。ここは、「生活中心域」となった地区であり、また、北東側の一角では「繁栄期」になると方形の区画内から碇が出土しているなど、舟入状の溝が集落を縦走し、「荷船が航行する」環境にあった。さらに詳しくみると、銭貨はこの一角では15世紀代まで希薄な一方、西側では時代を問わず濃密な状況である。河岸や倉庫に隣接する居住地という条件によるのであろうか。面白いことに、この遺跡では明銭は少量(18点、内3点土坑墓)ではあるが、その多くが16世紀代以降の1面から出土している。層位と銭貨の年代が整合するケースでもある。

元島遺跡の地は中世には大嶋郷と呼ばれていたように外海とも通じる砂丘背後の潟湖へ通じる島地であった。報告書で指摘されているように窯道具が付着する古瀬戸製品が多く出土しているなど(一括購入か)、内陸部と連絡する「物資集散地」であったとすれば、単なる農村とも言い難い。但し、遺構や遺物の様相からすればそれはあくまでもその枠内であったと思われる。

城館・城下の例では、まず福井県一乗谷朝倉氏遺跡⁹⁷⁾についてふれておかねばならない。朝倉氏遺跡といえは一乗谷城戸内の館と城下町が有名ながら、遺跡自体は谷の城戸外や少し離れた東の山上山城も含む広大な規模に及んでおり、近年では足羽川沿いの安波賀北側にも遺構が広く展開している事実が明らかになっている。昭和47年に福井県朝倉氏遺跡調査研究所が設置されて以来、本格的な発掘調査が行われるようになり、谷内外のかなりの範囲が調査され現在も継続されている。まず良く知られている2例の一括出土銭から紹介する⁹⁸⁾。

中規模屋敷跡群とされる城戸内中程の52次調査では石囲い土坑底から3,784枚の銭貨が出土した。銭貨は宣徳通寶を最新銭とするもので、唐・北宋銭が94%を占める一方、明銭は約5%であった。注目すべきは洪武通寶が僅かに4点しか含まれていないことである(ちなみに宣徳は1点)。銭貨には越前焼IV群の播鉢が

蓋をしてあったからか、16世紀中頃と推定されるとしている。明銭が少ないのは15世紀前半の様相ながら、そうであれば永楽：洪武比が97：2というのは想定しにくく、これはやはり16世紀後半への過渡の様相(それも北陸における)とみておくべきだろう。

一方、上城戸に近い第57次調査区では井戸底から一括して16,594枚の銭貨が出土した。銭貨は明銭の嘉靖通寶(初鑄年1527)を最新銭とするもので、唐・宋銭の占める割合は同様ながら明銭は2%一寸に過ぎない。しかも、永楽：洪武比は14：86と逆転しているのである。この井戸は朝倉氏滅亡時(天正元年：1573)の焼土層が覆う時点まで使用されていたとされており、その量からしてもやはり最後の段階に伴うとみてよいだろう。この銭貨を分析した永井久美男氏はベトナム陳・後黎銭10種(58点)を含む点に注目し、従来16世紀後半の様相とされてきた後黎銭混入例に実年代を付与できる貴重な例とされた。そうであれば、既述した明銭の割合といい永楽・洪武比といいまさに16世紀中頃過ぎの天文末～永禄辺りに銭貨をめぐる大きな変化をここ北陸においても確かめられたといつてよい。

ところで、一乗谷ではもちろんこれ以外に約7,000点以上出土しており、むしろ城下の出土傾向を捉えるにはこちらを分析する必要がある¹⁰⁰⁾。既に朝倉城下は一乗谷川に沿って南北の幹線道路が走り、それに沿って武家屋敷地と寺町また町屋ゾーンが混在していた姿が明らかになっている。注目されるのは、屋敷地では100㎡当たり5点前後の出土数なのに対し、寺院や町屋一帯では同20点前後の高率を示すことである。そのなかの一つである南北幹線道路が三叉路となる館跡南西の29次調査時では道路や町屋また下級武家屋敷地一帯では多くの銭貨(728点/3,200㎡)が出土したが、このうち520点は南北道路から派生する東西道路から出土している。この道路は橋を介して東側へ通じており、いわば交通上の要にある。想像をたくましくすれば定期市でも開かれたのであろうか。

なお、朝倉城下では明銭の割合は平均して約5%前後であり、既述した2例もその範囲内にある。15世紀末～16世紀代北陸の様相を示すものであろう。

画期という点で一つ紹介しておく例がある。愛媛県湯築城⁹⁹⁾は伊予守護河野氏が戦国期に居城とした城郭であるが、公園整備に伴い昭和63年度から主に山麓屋敷地を対象とした継続調査(平成13年度分までで計約30,000㎡)が行われている。重要な点は出土陶磁器

の分析から16世紀代それも16世紀中頃の天文年間に遺物の主体があるとされることで、ほぼ16世紀代以降の様相と捉えられる。銭貨は計113点（近世除外：不明13点）出土し、このうち明銭は28点（28%）を占めしかも永楽：洪武比が27：1であった。16世紀中頃を前後する一つの地域的傾向であろう。

なお、100一寸という数（0.4点/100㎡）であるが、城館・屋敷地では通常銭貨の出土点数はそれほど多くないのが常であって、有名な安土城の場合、築城から7年で戦火のため焼失したとはいえ、約20年に及ぶ広範囲の調査にもかかわらず僅か10点の出土に留まっている（城下町でも同様：平成21年度までの集計）。安土城の場合、城そのものが未完に加え調査そのものも遺構確認と環境整備事業が中心という事情もあるが、それにしても少ないといわざるをえない。

東京都八王子城¹⁰⁰は凡そ天正6年頃以降に築城され、同18年に落城した武蔵における北条氏の拠点である。山麓の御主殿郭で1,579点の銭貨が出土しており、落城に伴う火災によりこの内判読に至ったのは213点ながら、明銭は65点を数え、とりわけ永楽が45点を占めている（明銭比率30.5%）。この期の南関東の一括大量出土銭では通常さらに高率となることから、両者の比較例として大きな意味をもとう。山麓かつ落城という条件が多量の銭貨を残すことになったのではなかろうか。

街道の町場例としては阿武隈川の西岸平野中に立地する福島県郡山市荒井猫田遺跡¹⁰¹が好例である。旧国鉄操車場跡の再開発に伴い、平成8年度から本格的な発掘調査が行われ、鎌倉時代の街道沿いに営まれた「町屋」群と館跡またその北西の障子堀と複郭構成を採る14～16世紀代の「館跡」の存在が明らかになっている。総面積約72,000㎡に及ぶ広域調査は街道背後も広く調査対象となったことで、銭貨についても貴重な情報をもたらしている。

町屋ゾーンでは0.7点/100㎡なのに対し、後背地ゾーンでは約0.04点/100㎡（2,700㎡に1点）と大きく出土量が異なっている一方、北西館跡では0.2点/100㎡（約700㎡に1点）であった。また、明銭の比率は極めて低く（8/210）、僅かに戦国期に継続する北西館跡で目立つ程度である（館跡中心部では4/18）。この荒井猫田例は遺跡の内容と銭貨の様相が合致する好例といってよい。

寺院跡では山内を広域に調査した例として和歌山県根来寺¹⁰²があげられる。根来（円明寺）に覚鑿が入っ

たのは12世紀代であるが、山内に広く子院が成立するのは出土遺物からみて15世紀代以降、とりわけ秀吉の根来焼き討ち前の16世紀後半には谷奥から丘陵部にまで坊が連なっていたことがわかっている。しかし、豊富な貿易陶磁に比してこの各坊で銭貨はほとんど出土しない。僅かに菩提川を東に遡った谷内で出土した緡銭94点（詳細不明）が唯一まとまった例といってよい。中心部の円明寺北側では調査面積6,456㎡で23点の出土率であり（0.36点/100㎡）、むしろ地鎮遺構での伴出例が目立っている状況である（カワラケ21点に各銭貨1）。寺域が広大（約2×2.5km）ということに加え、主に農道や遺構確認調査などまとまった面積の調査例を欠いているものの（さらに初期の報告では銭貨そのものの言及がない）、やはり銭貨に乏しい。山内の西に隣接する西山城郭山麓部は瓦質の播鉢・土鍋・土釜が卓越し、町屋ゾーンとみられているが、ここでも10点に満たない（10,250㎡、但し堀が多くを占める）。これを山内の傾向とした場合、今後の課題として根来の門前となる西側坂本における町場の調査例が対比上重要となろう。

既に指摘されていることではあるが、如何に中世という年代幅とはいえ、売買行為や銭貨の所持・移動に伴ってかくも多くの銭が土中に消えてしまうものなのだろうか。六道銭にしる、鎮壇行為や塚にしる何れも貨幣としての銭貨から離れたいわば副次的な使用例である。そして、そこには密教や陰陽道、さらには民間信仰による神仏の介在する世界があった。ではより生活に密着した中世郷村～城館・城下を含めたエリアでは何に求めたらよいのか。恐らくそこには今まで見過ごされてきた銭貨消費のプロセスが存在するのであろう。克服すべき課題は多い。

5. まとめにかえて

以上、県内における中・近世遺跡の銭貨出土状況を集成・分析し、そのうえで性格が明らかな県外の広域調査例を紹介した。中世～近世にわたって銭貨はその本来の役割を越えた存在としても大きな意味をもっていったことは上記の諸例が物語っている。では大量出土銭はというと、明銭を含まない例（妙楽寺・文脇）は1～3万点と数量には富んでいるが、類例は少なく、これも永楽を含む段階に至って増加する。しかし、その様相は「250貫」を越えるものから、千点前後と数量的な幅が存在する。15世紀末以降、小口の消費例が増加するのと、洪武・永楽をめぐる民間の消費実態が

恐らく16世紀代の遺跡の様相に現れたのであろう。だいたい地方の為政者が本格的に銭貨に向き合った（それも経済の実態に対する）のもこの頃であり、房総では里見氏による近世初めの慶長年間の定書ほか初見¹⁰³である。ともあれ、地方版ではあるが筆者の作業を様々なかたちで生かして欲しいと願う。

注および引用参考文献

- 1) 小高 2010「千葉県における出土銭」『出土銭貨』第31号
- 2) 小高 2007「調査事例からみた中世出土銭貨の様相－関東地方の例から－」『出土銭貨』第27号
- 3) 既に川根正教による集成作業があり（「皇朝十二銭について」『加地区遺跡群Ⅳ』）、平成12年時点で41遺跡50点の出土が知られている。
- 4) 筆者 2000「陸沢町妙楽寺出土銭」『陸沢町史研究』第2号、なお、同町史研究3号で一部補足・訂正。
- 5) 助千葉県市文化財調査協会 2000『千葉市生実城跡』
- 6) 市原市馬立根元寺出土銭、筆者一部調査、容器は既報告（山田友治 1975「房総における中世のやきものについて」『史館』第5号）
- 7) 船橋市教育委員会 2007『東中山台遺跡群（36）』
- 8) 助千葉県都市公社 1974『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』*銭貨の容器となった広口壺の年代観は見解が分かれているが、筆者は口縁部の形態から判断した。
- 9) 高橋照彦 1997「千葉県市原市菊岡出土銭」『出土銭貨』第8号 *容器甕は報告時には所在不明
- 10) 助君津郡市文化財センター 1996『谷ノ台遺跡（B地点）』
- 11) 八千代市教育委員会 1974『千葉県八千代市 村上供養塚発掘調査報告書』
- 12) 助千葉県文化財センター 2005『市原市西野遺跡』
- 13) 助千葉県教育振興財団 2010『館山市萱野遺跡・宇戸台遺跡』
- 14) 助長生郡市文化財センター 1990『桂遺跡群発掘報告書』
- 15) 助印旛郡市文化財センター 1998『成田ビューカントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書（3）』（小菅天神台Ⅱ遺跡他7遺跡）
- 16) 助香取郡市文化財センター 2006『千葉県香取郡多古町桜宮遺跡』
- 17) 助香取郡市文化財センター 2000『名木不光寺遺跡』
- 18) 助千葉県文化財センター 2001『袖ヶ浦市山谷遺跡』
- 19) 助香取郡市文化財センター 1995『第六天遺跡』
- 20) 助千葉県文化財センター 1998『袖ヶ浦市荒久遺跡（2）』
- 21) 助千葉県市文化財調査協会 1996『土気南遺跡群Ⅷ』（後台遺跡ほか10遺跡）
- 22) （公財）千葉県教育振興財団 2014『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書23－大網白里市小西城跡－』
- 23) 助千葉県市文化財調査協会 2001『千葉市源町遺跡群－高津辺田遺跡・南屋敷遺跡－』
- 24) 木更津市教育委員会 1984『真里谷城跡』
- 25) 一宮町教育委員会 2004『中世の一宮』
- 26) 大栄町教育委員会 1989『千葉県大栄町 馬洗城址発掘調査報告書』
- 27) 助印旛郡市文化財センター 1990『千葉県印旛郡酒々井町長勝寺脇館跡』

- 28) 助印旛郡市文化財センター 2004『千葉県佐倉市 神門房下遺跡C地点－南部中学校埋蔵文化財調査－』
- 29) 助印旛郡市文化財センター 1992『千葉県成田市 駒井野荒追遺跡』
- 30) 助千葉県教育振興財団 2006『千葉市中野台遺跡・荒久遺跡（4）』
- 31) 藤沢氏の編年根拠は折にふれ示されているが、最新のものでは『愛知県史』別編窠業2（愛知県 2007）などがある。
- 32) その銭種構成は確認調査ではあるが、荒上地区で北宋2・洪武1・永楽5・宣徳1、向根古屋地区で唐宋5・洪武1・永楽2・ベトナム1であった（酒々井町教育委員会 1995『本佐倉城跡発掘調査報告書』）。以後の追認が期待される。
- 33) この点、筆者も既に言及した（「出土銭貨による年代推定－宣徳以降を中心として－」『出土銭貨』第33号）
- 34) 助千葉県教育振興財団 2007『国道道路改築委託（久留里）埋蔵文化財調査報告書2－君津市上新田張山遺跡・青柳向台遺跡－』
- 35) 助千葉県文化財センター 1989『君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書』・助君津郡市文化財センター 1994『外箕輪遺跡発掘調査報告書』・助君津郡市文化財センター 1997『－千葉県君津市－外箕輪遺跡Ⅲ』・『千葉県の歴史』資料編中世1
- 36) 助千葉県文化財センター 1990『安房郡鋸南町 下ノ坊遺跡B地点 発掘調査報告書』
- 37) 栗原町台遺跡（常滑4～6 a型式甕の骨蔵器5点）、千葉市廿五里城跡（塚下部に常滑9型式甕の骨蔵器、周辺に南北朝～室町期板碑群）、木更津市天神前遺跡（常滑6 a～9型式甕・壺6、古瀬戸後Ⅱ期の筒形容器の骨蔵器1、他に35基に及ぶ土坑墓・焼骨群）など、この内、一部15世紀代にまで下るかと思われる天神前の土坑墓1基で北宋銭3点が出土したのみである。なお、15世紀代紀年銘板碑4基を含む35点が出土した印西市打手第二遺跡ではその一帯で銭貨は見つかっていない。
- 38) 千葉市立郷土博物館平成21年度企画展図録『千葉市の戦国時代城館跡』に概要が紹介されている。
- 39) 棗塚遺跡は姉崎湊背後に営まれた中・近世集団墓（数次の調査あり）、八幡湊背後の様相は桜井敦史の石塔群を含めた考察を参照のこと（『市原市文化財センター研究紀要』Ⅲ・Ⅴ関係論文）。
- 40) 中馬場遺跡は渡し場・台宿から城館・城下の宿へ変貌し、近世に入っても繁栄した町場であるが、南側の根戸城との関係など課題もある。なお、3次に渡る調査と築瀬裕一による遺物分析また遺跡の性格付けがある（「柏市中馬場遺跡の中近世遺物について」『房総中近世考古』第1号）。この他、渡し場に伴うと推測される事例に多古町南借当遺跡（匝瑳市飯高一浦を結ぶ借当川の渡し場か、南宋銭までの緡銭110点他多量の古寛永・文銭・新寛永銭）がある。
- 41) 笹生衛ほか 1995「上総国畔蒜庄横田郷の荘園調査報告」『千葉県史研究』第3号 また、『千葉県の歴史』資料編中世1「2.村の生活」でもコンパクトな解説がなされている。応永期（14世紀末～15世紀前半）の検田帳から「いちは」が存在したことは確かである。現在でも小櫃川沿いに「市場川原」などの小字が確認され、河原に市場が開かれたのであろう。同時にそれは河岸の存在をも暗示するものであるが、このような場所にこそ意図的な調査が必要である。なお、中流域の木更津市下郡に「下宿・市場・市神」、茅野に「丹過」など市場関連の字名が確認される。
- 42) 香取神宮関係文書集として、『千葉県の歴史 資料編 中世2』

があるが、「宮中之屋敷水帳」を除いては宿についての具体的な様相は不明である。一方、玉崎社については、『中世の一宮』、また、中世千葉町の復原については『千葉いまむかし』No11・13号築瀬関係論文参照。

43) 助千葉県文化財センター 1999『市原市市原条里制遺跡－東関東自動車道(千葉富津線)市原市道80号線埋蔵文化財調査報告書－』、他に市原市でも調査歴あり。

44) 助千葉県文化財センター 1998『一般国道409号(木更津工区)埋蔵文化財調査報告書－木更津市菅生遺跡・祝崎古墳群－』、なお、館跡部分については調査会編『上総菅生遺跡』所収。

45) 助千葉県教育振興財団 2012『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書15－市原市竹ノ下遺跡・関尻遺跡・山小川遺跡、長南町田宿川間遺跡－』

46) 中・近世の水田面からどうして銭が出土するのか不思議であるが、一つには耕作の節目の神事に伴う可能性がある。また、一昔前でも水神ほか路傍の諸仏・諸神にカワラケと共に奉賽銭が上げられているのを記憶している方も多いのではなかろうか。神事という性格上、銭は回収されることなく、耕作地に混入した可能性がある。もちろん一つの要因だけで括るわけにはいかないが、銭が出土するにはそれなりの訳があるのだろう。

47) エメエ・アンペール 1870『Le Japan Illustre』(高橋邦太郎訳 1969『続・絵で見る幕末日本』から抜粋)

48) 助千葉県文化財センター 2002『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書9－東金市前畑遺跡・羽戸遺跡－』

49) 佐倉市教育委員会 1975『白井南』

50) 松戸市遺跡調査会 2005『行人台遺跡 発掘調査報告書』

51) 助千葉県文化財センター 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』(上貝塚第1遺跡ほか6遺跡)

52) 助印旛郡市文化財センター 2006『本佐倉北大堀遺跡』

53) 印旛考古資料刊行会 1986『千葉県佐倉市岩富萩山遺跡発掘調査報告書』

54) 流山市教育委員会 1988『千葉県流山市 三輪野山第三遺跡』

55) 我孫子市教育委員会 1981『鹿島前遺跡－第3次発掘調査概報－』

56) 助市原市文化財センター 1984『小田部新地遺跡』

57) 助印旛郡市文化財センター 『富里市稲荷谷遺跡』

58) 助山武郡市文化財センター 2000『小野山田遺跡群Ⅰ－鉢ヶ谷遺跡－』

59) 助船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター 1998『千葉県船橋市 印内台遺跡群(21)』ほか

60) 間野台・古屋敷遺跡発掘調査団 1977『間野台・古屋敷－佐倉市白井中学校建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告－』

61) 光町八石田遺跡調査会 1989『千葉県匝瑳郡光町 八石田遺跡調査報告』

62) 助君津郡市文化財センター 1995『－千葉県袖ヶ浦市－神田遺跡・神田古墳群』

63) 助千葉市教育振興財団 2003『千葉市亥鼻城跡・皿池東遺跡－平成13年度調査－』

64) 助千葉県文化財センター 2001『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書8－松尾町中谷遺跡－』

65) 大成エンジニアリング株式会社 2012『根木内城跡－第6地点発掘調査報告書－』

66) 助千葉県文化財センター 1998『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書1－山武郡芝山町古宿・上谷遺跡－』

67) 助君津郡市文化財センター 2002『－千葉県木更津市一中

尾遺跡群Ⅱ 東谷古墳群・東谷塚群・東谷十三塚』

68) 助東総文化財センター 1998『千葉県八日市場市 城ノ台遺跡・新城跡 千葉県匝瑳郡光町 傍戸遺跡』

69) 助香取郡市文化財センター 2004『かのへ塚遺跡』

70) 千葉県企業庁 1975『公津原』 なお、この経筒は木村 修により16世紀後半に想定されている(『千葉県の歴史』資料編中世1)

71) 助山武郡市文化財センター 1999『鷲山入遺跡』

72) 助千葉県文化財センター 2004『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書1－袖ヶ浦市南岩井作遺跡(吉野田遺跡)・西御祈禱谷古墳群・新開1遺跡、木更津市新開2遺跡－』

73) 助市原市文化財センター 1998『市原市新生萩原野遺跡』

74) 助千葉県文化財センター 1984『船橋市八木ヶ谷遺跡(遠山塚群)－千葉県立船橋地区高校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

75) 助千葉県都市公社 1974『八千代市村上遺跡群』

76) 佐倉市教育委員会 2009『千葉県佐倉市 直弥後谷津4号塚－不特定遺跡発掘調査助成事業－』

77) 助千葉県文化財センター 1998『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書1－山武町栗焼棒遺跡－』

78) 助千葉県文化財センター 2000『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書5』(松尾町・山武町一本松遺跡他4遺跡)

79) 佐倉市教育委員会 1975『白井南』

80) 助千葉県文化財センター 1988『成田市畑ヶ田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』(畑ヶ田地蔵前遺跡ほか6遺跡)

81) 助印旛郡市文化財センター 1995『大室十三塚』

82) 注15と同

83) 助山武郡市文化財センター 1994『田向城跡』

84) 助東総文化財センター 2003『千葉県八日市場市福岡遺跡』

85) 助千葉県文化財センター 1985『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－成田市烏山遺跡－』

86) 助千葉県文化財センター 1999『主要地方道成田松尾線Ⅸ－芝山町大台西藤ヶ作遺跡・深田台遺跡・洞谷台遺跡・大堀切遺跡－』

87) 市原市教育委員会 2009『上総国分僧寺跡Ⅰ』

88) 中世後半の輪宝墨描土器(小金城や白井城で出土)が代表ながら、仏・菩薩・明王を梵字で表したものなど(袖ヶ浦市荒久遺跡、成田市久井崎城)、多様である。銭貨を伴うものでは、発掘資料ではないが、千葉市誉田高田町春日神社出土遺物(二十五菩薩、なもの女など墨書合口カワラケ内に中世銭貨57点)がまとまったものといえる(誉田小 1974『誉田のあゆみ』)。この他、土坑内で多量の炭化米と一緒に出土した銭貨(6点)例(小見川町平良文館跡)もこの種か(小見川町 1975『平良文館址』)。

89) この点、『出土銭貨』(出土銭貨研究会)で特集が組まれたのは全国的な傾向をしるうえで 効果的であった((出土銭貨研究会 1997・1999「特集「井戸と銭貨」」・「特集「地鎮めと銭貨」」『出土銭貨』第7号

90) 松戸市遺跡調査会 2004『根木内城跡 第2地点発掘調査報告書』

91) 助千葉県教育振興財団 2011『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書－成田市松崎外小代内小代遺跡－』

92) 助千葉県教育振興財団 2012『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書17－成田市南城砦跡・大室石神遺跡・芝向芝遺跡・芝西霜田遺跡・芝東霜田遺跡－』

- 93) 中世屋敷地壁の窪み（千葉市黒ハギ遺跡：中世453点）また台地斜面（八千代市井戸向遺跡：中世660点）など。
- 94) 成田市駒井野荒追遺跡中世道路（県文化財センター調査分112号溝）で出土した45点の銭貨群（唐北宋34・洪武5・永楽4・模鑄1・不明1）など、大窯1段階頃の道と想定され、印旛郡市調査分とも矛盾しない。
- 95) 草戸千軒町遺跡の理解については、I～Vの報告書に拠った。広島県教委 1993～1996『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』I～V 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
- 96) 元島遺跡については次の文献に拠った。（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998『元島遺跡I（遺構編 本文）』・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999『元島遺跡I（遺物 考察編1—中世—）』
- 97) 1998年の資料館開館25周年記念展図録では27,000点と記載され、一方、報告をもとにした筆者集計では2012年度までで凡そ27,200点である。この間10年の出土点数が300点弱であることから、恐らく、27,300点前後という数になろう。なお、「朝倉氏遺跡」については足羽町時代から現在まで大量の概要および本報告があるが（本報告は現在I～Xまで）、留意しておかねばならないのは、各地区ともにその最下面まで掘ってはいないことと、年度によっては点数のみなどその総てが把握できるわけではなく、あくまでも全体の傾向である。とはいえ、朝倉氏の一乗谷存続期間と現在までの調査面積（凡122,000㎡）を考慮すれば、そう大きな誤差はないであろう。
- 98) 両者については、次の文献に拠った。福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2010『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告X 第51・52次 調査』・福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1997『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告VI 第29・30次 第57・58次 第83次調査』
- 99) （財）愛媛県埋蔵文化財センター 1998～2002『湯築城跡』第1分冊～第5分冊
- 100) 八王子市教育委員会 2002『八王子城跡御主殿一八王子城跡XⅢ八王子城跡御主殿発掘調査報告書一』
- 101) 荒井猫田遺跡については把握しているだけで郡山市教育委員会による17次までの調査報告がある（『荒井猫田遺跡』I～IV区 1998～2006）。
- 102) 根来寺については、和歌山県教育委員会による農道建設工事に関わる調査概報（1978）以後、和歌山県文化財センター調査分も含め1982年報告分まで29次の調査報告を対象とした。
- 103) 慶長17（1612）年の定書では、「金子」、「京銭」、「新ひた銭」、布、綿と米との売買また交換比率が定められている（『岩崎家文書』『千葉県の歴史 資料編 中世5』）

コラム～小判は出るか～

発掘調査で小判またはそれに類するものが出たという話は聞かないが、偶然の機会となると県内でも多古町など幾つかある。その一つの例を紹介しよう。天保3（1832）年7月、望陀郡女喰村（現君津市大戸見）福蔵寺の住職は庫裏の床下から「古壺分金80両」と銭20数文の入った瓶が出土したため、村役人を介して三本松役所に届け出た。住職の「推察」に拠れば天明年中に寺で死去した坊さんが金持ちであったと聞いており、その「困い金」かとする。その後、村役人一同で役所に宛て、件の金銭は先代住職が埋めたものに相違なく、寺へ返還いただければその修復費用に使いたいと要望した。その後この一件がどう処理されたか不明であるが、金持ちと埋蔵金結び付き、しかも寺の修復へとエスカレートした経緯など、あり得べきことではある。なお、発見に至った直接の動機は床下の煙硝採取に伴うものという（滝口一男 1961『松岡郷土誌』二集）。ちなみに、1分金は4枚で1両相当。